

花葉会賞受賞者紹介

実直で信念に生きた行動の人 青島 尚祐さん

村井 千里

青島 尚祐氏の略歴

昭和7年7月6日 長野県に生まれる
昭和26年3月 長野県立下伊那農業高校卒業
昭和31年3月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業
昭和31年5月 日本園芸生産研究所花き部
昭和32年4月 千葉県立野田高校教諭
昭和50年4月 千葉県立小金高校教諭
昭和54年4月 千葉県立沼南高校教諭
昭和55年4月 千葉県立柏北高校教諭
平成5年3月 千葉県立柏北高校退職
平成5年4月 (株)千秋社(清水公園の樹木管理)
平成9年6月 (株)千秋社顧問
平成11年6月 (株)千秋社退職
平成11年4月 松戸市「21世紀の森と広場」緑の相談員
となり現在に至る

この間「野生の樹木を見て歩く会(会員100名)」に参加し、創立者の東京理科大学村上孝夫名誉教授の後任として、会長を務めている。

青島さんは千葉県立農高の先生をと考え、園芸で教員試験に合格。だが千葉県に最初に建設される鉄筋校舎に見合う庭造りのできる先生をと、野田高校の校長が白羽の矢を射ったのが青島さん。花の生産を指導するという最初の目的は異なっても、植物を栽培し、管理できるということで、普通高校の理科(生物)の教員を受託されたそうである。

校舎の建設で、旧校舎が変わり、温室が仮のビニールハウスになったりする中で、植物を通して生徒との交流を図り、冬は一晩も欠かさず、加温のためのストーブの給油に夜中に登校するという、実践力、信念の持ち主であった。鉄筋校舎への植物の配置と、現在のインドアグリーンの先駆けを実行されたり、授業には多くのアイデアを持ち、実験装置の開発、分子生物学の導入などを行い、進歩的な授業を展開した。

校舎の完成につれ、中庭は室内と同じ感覚で楽しめる庭として、下足に履き替えずに行動できるものとしてのフランス式庭園を造ったが、その中に和風の趣も取り入れるなどの工夫をされている。特に日本の南から北に自生する植物を生態観察園風に、乾燥地や湿地ゾーンを設



青島 尚祐氏

けるなどして、学習のための教材園を兼ねた独特の庭園を作成して、広く各地から見学者が訪れたそうである。また、学校花壇の設置や野田市の「花いっぱい運動」にも積極的に参加されたほか、千葉県高等学校教育研究会の園芸部会の地区委員に選出され、その後、同部会の編集委員として部会誌の編集に退職されるまでの20年間余を勤められた。

小金高校に移られてからは、昇降口前の庭園設計、アルミ温室の導入などを行い、その中に動物飼育室を設け、ハツカネズミの毛色の遺伝などまで幅広く実験し、目で見る教育に努められている。

沼南高校では、生物実験として、一人一鉢の菊づくりを試みた。その結果、勤労体験学習の指定校となり、全国会議に出席するなど、実践力が高く評価され、県内では有名教師として、何を提案し、発表するかと注目された。カイコの繭の色を緑、黄、オレンジ、青などに変えたが、致死遺伝子により純系を得ることができず、その先に出ることは不可能であったようだ。

直ぐに柏北高校に移り、中庭の設計を行ったりと、多忙な毎日を実直に勤め上げて、高校教員としての職を辞された。

教職を定年退職された後、(株)千秋社に呼ばれ、清水公園の樹木の管理を分担され、植物園協会の規定に見合う植物の多くを導入するほか、野草観察路などを整備されたりしている。

略歴の補足として記したように、多くの有識者の集う「野生の樹木を見て歩く会」の会長を続けておられるなど、自己宣伝はせず、人の苦勞を買って出るといふ、実直で行動する方として、私は深く尊敬の念を抱いている。

.....

花の伝道者として活躍する 落合 哲平氏

小 泉 力

落合 哲平氏の略歴

- 昭和9年7月8日 千葉県富津市に生れる
- 昭和29年3月 千葉県立木更津高校卒業
- 昭和30年3月 千葉大学園芸学部農業別科修了
- 昭和30年9月 東京都足立区島根町の実際家山崎邦雄氏のもとで研修（チューリップの球根促成栽培）
- 昭和31年4月 神奈川県茅ヶ崎市の実際家横田長吉氏（東山園芸株）のもとで温室切花栽培の研修。この間南米（ブラジルかアルゼンチン）移住を志望し花づくりで身を立てるべく研修に励んだがトラホームが検診の結果判明、南米行きを断念した。
- 昭和35年9月 サカタ種苗株（現 株サカタのタネ）茅ヶ崎試験場勤務。温室花卉（シクラメン、球根ペゴニア、グロキシニア、ストック、実生フリージアなど）を担当し、採種技術や育種方法を習得した。
- 昭和36年9月 不動化学工業株平塚工場勤務。
- 昭和38年8月 財千葉県都市公社辰巳団地熱帯植物園勤務（恩師浅山英一先生の指導のもと熱帯・亜熱帯植物の栽培維持保存管理にあたる）。
- 昭和45年4月 財千葉県観光公社千葉県南房パラダイス勤務（植物園の企画、立案、建設にあたるが主として熱帯、亜熱帯植物の収集及維持管理に務めるとともに園芸係長、技術課長として後輩の指導にあたる）。
- 昭和55年4月 財千葉県観光公社千葉県県民の森管理事務所勤務（指導課長及び次長として県民の森の運営管理にあたるがこの間林内の森林植生調査を行なう）。
- 平成2年4月 財千葉県地域整備協会袖ヶ浦事務所勤務（京葉地区の緑地の維持管理にあたる）。
- 平成6年4月 落合園芸場を立ち上げ花卉栽培を始める。主として花壇用苗物の生産と販売を行なっている。年間約15～20万ポットを生産する。主な栽培品目1年草を主体とし（2～3ヶ月で成品化できるもの）、秋から冬はポットハボタン、パンジー、ピオラ、ストック、キンギョソウ、ダイアンサス、シロタエギクなど。春から夏はペチュニア、ピンカ、ペンタス、ペゴニア、サルビア、マリーゴールド、ケイトウ、アマランサス、コリウスなど。



落合 哲平氏

その他

社会活動の一環として地域社会に寄与するため先輩林角郎氏とともに、地元館山市はもとより安房郡内を中心とした園芸（花卉栽培）教育の普及と啓蒙を行なっている。一人でも多くの方々が環境緑化や植物に親しむ心を育てるために、「街づくりは花づくりから」を提案している。

現在、RHS J、JHBS、GA及び日本植物園協会の会員に所属している。また、日本キリスト教団南房伝道所（教会）の役員も兼務している。昭和30年松戸で受洗。

以上の経歴を拝見し、落合さんが農業別科で浅山英一先生の薫陶を得てより今日まで、花と共に過ごしてきた道のりを知ることができた。若き日の修行時代は当時の先進花農家で研修し、教を請い、技術を磨いた。

昭和39年当時、「辰巳団地熱帯植物園」で初めてお目にかかった時はシクラメンの鉢替えをしていたが、自信に満ち、楽しげにやっていたその時の落合さんと現在と少しも変わらない。花の心を知る落合さんはどんな花でも作りこなしてしまうような名人技の持ち主である。

千葉県が「県立植物園南房パラダイス」創設時に技術者として招かれて植物の蒐集や栽培の指導を担当し、以後熱帯植物を中心とした温室や庭園、展示、観光事業等の充実に尽力してその隆盛に貢献してきた。「県民の森」担当の際は県民が自然と親しむフィールドの現場責任者として活躍すると共に、豊かな房総の森にも目を向けての植物調査も行っている根っからの植物好きである。

退職後は自宅近くでハウス栽培を開始し、自ら行う花生産者となって、その栽培技術を遺憾なく発揮していると共に、ハンギングバスケット協会や地域への花の啓蒙、普及にも貢献している。

安定した道を選ばず、常に花作りに挑戦し続ける生き方は70歳を過ぎた今日も青年のように一貫している。彼こそが農業別科の専攻生として園芸学校の伝統を受け継いだ花の伝道者ではないだろうか。

伝統あるシクラメン産地の発展に尽力の人 千藤 猛司氏

村井 千里

千藤 猛司氏の略歴

昭和12年1月1日岐阜県に生まれる
昭和30年3月 恵那高校卒業
昭和30年4月 千葉大学園芸学部農業別科入学
昭和31年3月 同上修了
昭和31年4月 日本園芸生産研究所研修生
昭和32年3月 同上修了

その後、三井戸越農園や新潟県下での短期研修を経て、家業の「松の本シクラメン園」を継承。

平成16年11月 大日本農会より永年のシクラメンを中心とした経営により、花き部門の農事功績者として「緑日授有功章」を授賞。

千葉大園芸学部の温室管理室の入口で、一人黙々と種子を播いている無口な青年の姿が、何故か、50年経た今日でも思い浮かぶ。ちょうど卒業論文の実験で農場の片隅を占有してバラの手入れや調査をしていた夏休みの或る日のこと。それが園研の研修生であった千藤さんだ。

埼玉農試の越谷支場勤務となり、シクラメンの栽培試験に関係して、恵那の有名なシクラメン園である松の本シクラメン園が千藤さんの農園と知ったほどの交友の浅さではあるのだが不思議なものである。

千藤さんの農園を、何の機会であったか思い出せないのだが、一度、お邪魔した。しかしシクラメンの印象ではなく、多段式に作られたベンチでアンスリウムの鉢を栽培され、名古屋へ出荷していると説明していただいた。何か一日の忙しいスケジュールの一時であったため、松の本といわれる大木の松の木もじっくり拝見していないような私だが、千藤さんを語るのは失礼だが、お許しを願って、昨年度、大日本農会の農事功績者として「緑白授有功章」を授賞されるに至った経緯を紹介させていただこう。

受賞のポイントは「安定した花き経営規模の現状」。新品種の育成と新技術導入によるシクラメンの種苗・鉢物生産と他品目を組み合わせた花き鉢物生産による経営の確立という「農業改良等の実績」。地域リーダーとして伝統的なシクラメン産地を新技術、新品種、新品目を導入して維持・拡充を図ったほか青年農業者の育成に努めた「地域産業への貢献」が挙げられている。

松の本シクラメン園は、お父さんの恩三さんによって創業され、恵那地方のシクラメン生産の推進に偉大な功績を挙げられてきた。恵那地方のシクラメンは伊藤孝重氏によって大正末から昭和にかけて、ドイツのピンネウス社の種子を購入し、種苗生産業として確立。これに影響を受けて千藤恩三さんが生産を始め、昭和9年には、戦前のシクラ



千藤 猛司氏

メン販売の最盛期を迎え、松の本シクラメン園では1坪大のフレームが200個を超えていたそうである。しかし第二次世界大戦でシクラメン生産を中止し、戦後の安定を見て再開、種苗生産を中心に経営。昭和32年から猛司さんが加わり、40年には経営を移譲され、青色申告による事業家計分離を行い、全国的にシクラメン生産者が増えたことから種苗生産を飛躍的に拡大し、全国からの需要に応えた。

一方、シクラメンと平行して導入してきたプリムラや観葉植物の栽培にも力を入れ、近代化資金などを活用してガラス室を年々増設し、47年には鉄骨温室を建設して、最新施設による近代的鉢物生産を開始するが、48年のオイルショックで苦しい立場に立たされた。しかしその対策として近隣生産者とコークスのボイラーを導入して重油に替え、無加温栽培可能なクレマチスやボタン等を作目に加えて経営を立て直した。またシクラメンは種苗生産のほかに鉢物の出荷に徐々に切り替え、昭和60年以降は鉢物生産を重点においた経営とされ、シクラメンの裏作にエラチオールペゴニアを加え、ベルギーの小鉢用クンシラン、アンスリウム等を輸入して作目に加えてもみた。また栽培技術では県農試が開発した底面給水法や調整ピートの培土による良品生産法を先駆的に導入して経営を確立させている。

さらに、良品を出荷する鉢物生産者としての信用から、大手食品会社と花壇苗の契約栽培が始まり、平成元年から今日に至るまで契約を更新している。

この間、昭和40年代には、生産者6名による技術研究グループを組織し、60～62年は「恵那花き研究会」の会長を務めたり、県指導農業者として活躍。農業大学の学生などの研修を受け入れ、農業の担い手養成に貢献。シクラメンの種苗販売を通して、毎年70名を超える全国のシクラメン生産者の相談に応じたり、技術の公開を行ったりと、全国のシクラメン産地育成への功績は偉大なものである。

平成5年には、県、市、生産者の協同出資で「恵那のシクラメン」を出版し、恵那シクラメンをブランド化し、市場での定着を図る仕掛け人の一人でもあった。

家族2人での経営は、年間延べ1,072人の雇用(通年雇用3人)で、その多くは地域の就労チャンスを確保する目的で、市のシルバーセンターにより高齢者を雇っている。

.....

All-America Selections Breeder's Cupを受賞した

竹下 大学氏

編 集 部

竹下 大学氏の略歴

昭和40年6月10日生まれ

平成元年3月 千葉大学園芸学部卒業

平成元年4月 キリンビール(株)入社。

現在、キリンビール(株)アグリバイオカンパニー植物開発研究所勤務。

竹下大学氏は平成の時代に入って大学を卒業した、もっとも若い花葉会賞受賞者である。

入社以来一貫して交雑育種による花の品種改良に取り組むとともに、花の育種基盤整備に従事。ペチュニア、ニチニチソウ、プリムラを中心に多数の品種を商品化し、キリンビールを世界有数の育種会社として認められるまでにする。

特に匍匐性のF₁ペチュニアというまったく新しいコンセプトの品種 'Purple Wave' を育成したことの功績は大きい。その他、これらの功績に対して、2004年 All-America Selections が新設した、All-America Selections Breeder's Cup の、名誉ある初代受賞者に選出された。花葉会賞はこの功績に対して贈られたものである。

All-America Selections Breeder's Cupとは、北米の園芸業界に大きく貢献した品種を育成したブリーダー個人を表彰するものである。ブリーダーのモチベーションを高める目的もあるため、現役ブリーダーを対象としている。AASの性格上、種子系の花と野菜に限定しているようである。

選定理由は、匍匐性のF₁ペチュニアという全く新しいコンセプトの品種 (Wave) を育成したこと、他社に先駆けて一般消費者ニーズを重視した品種を育成し、その品種がただヒットしただけに留まらず、北米花卉産業の事業構造を大きく変えるほどのインパクトを与えたこと、ペチュニアだけでなく、ニチニチソウでもAAS入賞品種を育成したことが挙げられる。

自己紹介を兼ねて、これまでの業績等を本誌10~13ページに「日の丸ブリーダーの一人として」と題して原稿をお寄せいただいているので、そちらを読んでいただきたい。

また、花葉会賞受賞記念講演でも同タイトルで、育種に対する信条、後輩へ向け、ブリーダーとしてやっていくためのアドバイス等を話していただいた。その中のいくつかの言葉を書き留めて氏の原稿を補足し、紹介文としたい。



竹下 大学氏

「ブリーダー 棘を失ったらフリーター」と、プロの開発者として棘を大事にし、アンチ研究室、アンチバイオテクノロジー育種として、フィールドでの仕事・交雑育種をしている。

Conventional (通常の) ブリーディングをかがげ、(Conventional = 根 勉 書 成る) ともじり、育種には根気、勉強、記録し、成果を発表することが大切である。これにより、会社や社会に自分をアピールする。育種を達成するためには人の協力、植物の協力が必要であり、育種を成功させるためには受身でなく、運を見つけ、運を掴む努力が必要で、自分がAASの賞を受賞できたのも多くの幸運があったからとする。

現在進行形でサバイバルしている最中だが、商業育種はエンドレス。

・そのブリーダーに求められること

- 根 根気、根性、根拠を示す
- 芽 芽を出すこと
- 葉 言葉で明確に伝えること
- 花 花火を打ち上げること
- 実 実行力で示すこと

・花の育種を通じて実現したいこと

- 個として、社会貢献、文化、楽しみ
- 日本人として、愛国心、プライド
- 会社員として、コスト意識、利益
- 竹下大学として、ブリーダーの地位向上、
- 理想の育種会社を作ること

弱冠40歳、これからの活躍に大いに期待したい。